「核兵器のない世界」構築への女性の役割

栗原淑江

はじめに

昨年（二〇一五年）は第二次世界大戦終結七十年、被爆七十年の節目の年であった。国際社会では、NPT（核不拡散条約）再検討会議をはじめ、核軍縮にとって重要な国際会議が数多く開催された。

唯一の被爆国である日本でもさまざまな記念行事が行われ、広島や長崎をはじめとする各地で、シンポジウムや講演会が開催された。八月六日には、広島市内で、原爆投下七十年シンポジウム「二度と戦争を起こさない――核兵器廃絶をめざして」が開催され、宗教者をはじめ国会議員、識者、市民が集った。

また、十一月には、核兵器と戦争の廃絶を目指す「第61回パグウォッシュ会議」の翌日、「核兵器廃絶に向けた科学者と宗教者との対話集会」が、長崎カトリックセンターで開かれた。主催は世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会と長崎県宗教者懇話会で、一般市民も含め約百二十名が参加し、核兵器廃絶に向けて協力し合うことを確認した。

また、浄土真宗本願寺派の総長をはじめ、多くの宗

教者が「戦後70年にあたって非戦・平和を願う総長談話」を発表している。さらに十二月には、広島で「被爆70年ジェンダーフォーラム in 広島」が開催された。

「核兵器のない世界」の実現は、人類の悲願といえよう。そこで宗教者が果たす役割は大きいものがある。本日は、その一つである創価学会・SGI（創価学会インタナショナル）の活動を紹介したい。その際、とくに女性たちが主体的に活動している姿が目立つので、そこに注目して考察したい。

1　SGIの平和運動の原点――戸田城聖の「原水爆禁止宣言」

SGIの平和運動の原点となっているのが、一九五七年九月八日に戸田城聖創価学会第二代会長が発表した「原水爆禁止宣言」である。そこで戸田は、概要、次のように宣言した。

> 核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今、世界に起こっているが、私はその奥に隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う。それは、もし原水爆を、いずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。
>
> なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、サタンであり、怪物であります。[1]

この宣言から五十二年後の二〇〇九年九月八日、池田大作SGI会長は、「戸田第2代会長生誕110周年記念講演」として、「核兵器廃絶へ　民衆の大連帯を」を発表した。そこでは、次のように述べている。

> かつて核軍拡競争が激化した時代に、こうした核兵器が人々にもたらす脅威や恐怖という民衆の側からの視点に立って、核兵器廃絶を訴えたのが、師の戸田第2代会長でした。

逝去の7カ月前、戸田会長は病の小康状態の中で、青年を中心とした5万人を前に核廃絶を遺訓の第一とする「原水爆禁止宣言」を、52年前のきょう9月8日に発表したのです。

現在の状況に照らして、私が重要と考える宣言の柱は、「政治指導者の意識変革」「核兵器禁止の明確なビジョン」「人間の安全保障のグローバルな確立」の3点です。

第1の柱は、「われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、サタンであり、怪物であります」と述べ、核保有の奥底にある国家のエゴイズムを厳しく指弾し、指導者の意識変革を強く促した点です。

「サタン」や「怪物」といった表現は、いささか唐突で奇異な印象を与えるかもしれませんが、核抑止論の底流には、自国の優位や安全のために人類を犠牲にすることも辞さない、常軌を逸した非情の論理が脈打っていることを人々にわかりやすく伝えるとともに、指導者に内省を求めることに主眼がありました。……

第2の柱は、「もし原水爆を、いずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきである」と述べ、いかなる理由があろうと、いかなる国であろうと、核兵器の使用は絶対に許されないと明言した点です。……

第3の柱は、「核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今、世界に起こっているが、私はその奥に隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う」と述べ、核実験への抗議もさることながら、多くの民衆の犠牲の上で成り立つ安全保障思想の根絶を図らない限り、本質的な解決はありえないことを指摘した点です。(2)

このように指摘したSGI会長は、その後の半世紀の歩みをひもとき、核兵器廃絶へのさらなる決意を披歴している。

「いやしくも私の弟子であるならば、私のきょうの声明を継いで、全世界にこの意味を浸透させてもらいたい」との師子吼を、私は一日たりとも忘れることなく、その場で胸に焼き付けた直弟子として、核廃絶への潮流を高める挑戦を続けてきました。……

こうして私どもは、師の「原水爆禁止宣言」を時代精神へと高めるべく、半世紀にわたり行動を続けてきました。今後も、民衆次元から核廃絶を目指す運動に、更に全力であたっていく決意です。……

このまま座して地球の脅威を看過するのではなく、私たちが生きるこの時代に「核兵器のない世界」の実現は不可能ではないことを、民衆自身の力で示そうではありませんか。(3)

こうしたSGI会長の主張の根底には、核兵器がもつ悪魔性についての認識がある。仏教では、人間や自然の奥底には「宇宙生命」ともいうべき根源の一法が脈打っていると考えるが、核兵器は、人間や自然のすべてを破壊し尽くす点で、最大の悪であると強調しているのである。

2　創価学会の核兵器廃絶活動

創価学会は、そうした戸田第二代会長の遺志を受け継ぎ、一貫して核兵器廃絶運動を展開してきた。展示活動や、署名活動、出版などである。(4)

展示活動としては、一九八二年から開催されている「核兵器――現代世界の脅威」展がある。これは、国連広報局及び広島・長崎市と協力し、ニューヨークの国連本部を皮切りに世界二十四カ国三十九都市で開催したものである。広島、長崎の被爆写真、被爆物品の展示をはじめ、核の脅威を余すところなく浮き彫りにし、同年の国連軍縮特別総会での「世界軍縮キャンペーン」実施の決定に、大きなインパクトを与えた。北京、モスクワ、ウィーン、パリ、ベルリンなど、核保有国はもとより、イデオロギーや社会体制の異なる各国に巡回展示され、核廃絶、軍縮への世論を喚起した。見学

者は世界で百七十万人に及び、核軍縮に向けての世界的な世論の潮流をつくり出してきた。

二〇〇七年から開催されている「核兵器廃絶への挑戦と人間精神の変革」展は、戸田第二代会長の「原水爆禁止宣言」五十周年を記念して制作されたものである。核兵器廃絶のためには、人間の精神の変革が不可欠であることを訴え、広島・長崎をはじめとする日本国内、ジュネーブ国連欧州本部をはじめ世界各国で開催されている。

また、署名運動としては、一九七五年に核兵器廃絶を求める一千万人署名をニューヨークの国連本部に提出した。さらに、一九九八年からは、「アボリション2000」署名運動を展開。「アボリション2000」は、核保有国に対し期限付きで核兵器の廃絶をめざし、具体的な前進を求めていく地球的なネットワークをもつ運動である。創価学会は、核時代平和財団会長のデイビッド・クリーガー氏の呼びかけに賛同し、一九九七年秋から翌年にかけて千三百万以上の署名を集め、ニューヨークの国連本部に提出した。

さらに、二〇一〇年からは、「核兵器禁止条約」の制定を求める署名運動を展開している。これは、池田SGI会長が二〇〇九年九月に発表した「核廃絶提言」などを具現化するため、青年部が全国で実施した署名運動で、二百二十七万人の声が集まり、二〇一〇年五月に国連に提出された。こうしたこともあり、同月に開催されたNPTの再検討会議において、はじめて「核兵器禁止条約」の言及がなされた。

被爆七十周年の昨年八月には、平和運動に携わる二十三カ国の青年が集い、広島で「核兵器廃絶のための世界青年サミット」が開催された。これは、広島市や長崎市、広島平和文化センター、核時代平和財団、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）などが後援したもので、会議の合間には世界の青年たちが平和記念公園や原爆資料館を訪れ、核兵器廃絶への誓いを新たにした。

さらに、昨年十月には、キューバの首都ハバナで「核兵器なき世界への連帯——勇気と希望の選択」展を開催した。これは、二〇一二年八月、広島でのIPPN

W世界大会で初公開以来、世界各国で行われてきたもので、昨年十月は、ハバナで開催された「宗教間対話と世界平和のための国際会議」に合わせて行われたものである。開幕式には宗教者ら約四百五十名が出席。大きな反響を呼んだ。

このように、SGIは、戸田第二代会長の遺訓の実現のため、世界中で核兵器廃絶に向けた活動を展開しているのである。

こうした活動に対しては、内外の識者から賛同と期待の声が上がっている。国際平和教育研究所・名誉創設者のベティー・リアドン氏は、次のように述べている。

> 国連に対する池田SGI（創価学会インタナショナル）会長の毎年の提言では、軍縮への提案を学ぶことができます。
>
> 皆さまの探求は、世界に貢献していく礎となります。グローバル社会の一員として交流を重ね、互いに学び、支え合っていくならば、核兵器廃絶への大いなる力となることができるでしょう。
>
> 皆さまは、新しい世界を思い描くことができます。兵器が人間にとって不要な世界、兵器によって地球が破壊されない世界、そして、絶滅という恐怖に縛られない幸福な世界を想像できるのです。……
>
> 核兵器廃絶への皆さまの挑戦が実を結びゆくことを、深く祈っています。(5)

3　女性たちの活動――創価学会女性平和委員会を中心に

SGIの平和運動で目立つのは、女性たちが主体的に活動を展開していることである。いうまでもなく、平和構築は男女ともに取り組むべき課題であるが、生命の再生産や日常生活の大きな部分を担う機会が多い女性は、その体験からして、社会のあり方に対してさまざまな選択肢を提示することができるだろう。しかし、歴史をひもといてみると、女性たちは往々にして社会の主役というよりは脇役になることが多く、その

発想や発言、行動が社会に影響を及ぼすことが少ない傾向にあったのはたしかである。

そうした状況に対して、SGI会長は指摘している。

「平和の文化」に果たす女性の役割について言及したいと思います。

人類の長い歴史のなかで、戦争や暴力、圧政や人権抑圧、疫病や飢饉など、社会が混乱や不安に陥った時、最も苦しめられてきたのが女性たちでありました。

にもかかわらず、社会の歩みをたえず「善」なる方向へ、「希望」の方向へ、「平和」の方向へと、粘り強く向けてきたのも、女性たちであったといえましょう。(6)

このように、女性たちによる平和運動を紹介した後、生活のなかで、対話を通して人間の絆を強化し、それを拡大していく女性の役割に期待を寄せている。

こうした取り組みとともに欠かせないのが、日々の生活の中で「平和の文化」を具体的に創造していく挑戦でありましょう。

〝一人ひとりが日々、粘り強く平和の振る舞いを持続する過程の中に「平和の文化」が存在する〟と訴える平和学者のエリーゼ・ボールディング博士は、とくにこの面での女性の役割を重視しています。

平和といっても遠きにあるものではない。他人を大切にする心を育み、自らの振る舞いを通して、地域の中で友情と信頼の絆を一つ一つ勝ち取っていく中でこそ、世界は平和へと一歩一歩前進するのです。

毎日の振る舞い、そして地道な対話を通し、「生命の尊厳」「人間の尊厳」への思いを高め合う中で、「平和の文化」の土壌は豊かになり、新しい地球文明は花開くのです。(7)

また、二〇一〇年に発表された「第35回SGI提言」

においても、ＳＧＩが社会における女性の役割に一貫して期待を寄せてきたことを述べている。

さまざまな脅威に翻弄されてきた女性たちに教育の機会を広げ、女性たちが、危機を打開する主体者として立ち上がり、自らが望む方向へと時代の流れを変えていく――。そのためのエンパワーメントの種子を蒔いていくことが喫緊の課題だと思うのです。

思えば、創価学会の牧口初代会長も〝女性たちこそ未来の理想社会の建設者〟との信念で、女性の地位が著しく低かった１００年前の日本で、女子教育の普及に情熱を注ぎました。……

ＳＧＩでは、女性が主役となっての平和運動を世界で進め、日本では、平和学者エリース・ボールディング博士の監修で制作した「平和の文化と女性」展や、地域における啓発の場としての「平和の文化フォーラム」の開催などに力を入れてきました。

これらの活動に込めた〝女性こそピースメーカー（平和の創造者）〟とのメッセージは、牧口会長の信念を現代に蘇らせたものであると同時に、２０００年10月に国連の安全保障理事会で採択された１３２５号決議の精神とも通底するものです[8]。

また、そうした思想に根差すＳＧＩ運動の特質について、次のように指摘している（二〇〇九年九月八日、「核兵器廃絶へ　民衆の大連帯を」）。

〝平和な生活を送りたい〟〝大切なものを守りたい〟〝子どもたちに苦しい思いをさせたくない〟といった、人間としての当たり前の感情さえ持ち合わせていれば十分です。……

私どもＳＧＩは、自分たちの身の回りで人間性の絆を強めていく「対話」こそ、迂遠のようでも世界平和への直道であると信じ、人間主義に基づく民衆の連帯を広げてきました。その輪は現在、１９２カ国・地域に広がっています。……

私たちは、核兵器廃絶への挑戦は「戦争のない世界」の基盤をつくる挑戦であり、その未曾有の挑戦に連なっていくことが〝未来への最大の贈り物〟になるとの誇りをもって、ともに手を取り合い、グローバルな民衆の連帯を力強く築いていこうではありませんか。(9)

こうした池田SGI会長の期待を受けて、SGIの女性たちは地域社会や職場などにおいて、地道で広範な活動を展開してきた。なかでも、創価学会女性平和委員会は、精力的に平和のための活動を行ってきた。同委員会は、「平和は一人の心の変革からはじまる」との信念で、草の根の平和運動を展開し、ネットワークを広げてきている。

核兵器廃絶に向けての活動としては、最初の被爆国を生きる者の使命として、①核兵器の悲惨さを世界へ訴える、②「核兵器のない世界へ」の世論を喚起する、③対話を通し、平和への意識を啓発すること、をめざしている。

具体的な活動としては、戦争体験の証言集をはじめとする出版活動、核軍縮の専門家による講演会やセミナーの開催、展示活動、体験談発表大会などがある。

とくに反響を呼んだのは、一九八一年から出版された、戦争体験者の証言集である。戦争の記憶を風化させてはならないと、メンバー一人一人が、戦争体験者のもとを訪れ、重い口を開いて語ってもらった証言を筆に起こしていったのである。十年をかけて『平和への願いをこめて』全二十巻が完成した。(10) そのうち、主として第四巻　広島・被爆その後編『ヒロシマの心・母の祈り』、第十三巻　被爆二世（長崎）編『終わりはいつですか』に、被爆体験が収録されている。

さらに、終戦・被爆六十年の二〇〇五年には、戦争体験を継承し、記録する運動を展開した。その際、百八十名の証言を映像に収め、それをもとに三十一名の証言を収録したDVD『平和への願いをこめて――女性たちの戦争体験――』を制作した。

すなわち、①被爆・広島、②被爆・長崎、③沖縄戦、④引き揚げ、⑤戦火の中の看護婦たち、⑥戦時下の女

性と子どもたち、⑦空襲、である。

これをもとに、五言語（英語、スペイン語、フランス語、中国語［繁体字・簡体字］）版ＤＶＤ『平和への願いをこめて――広島・長崎　女性たちの被爆体験――』を作成した。これは、小中学校や、地域のセミナーなどで教材として用いられ、好評を博している。

このなかで、①被爆・広島では、二十一歳の時に被爆した塩田キクエさんらが証言。塩田さんは、地獄絵さながらの広島市内を逃げまどい、翌日、十四歳の妹の焼け焦げたモンペを発見。十歳の弟は大火傷を負い、母も原爆症で一カ月後に亡くなった。

また、②被爆・長崎では、子どもとともに被爆した橋本トヨミさんらが証言。橋本さんは、被爆以来、原爆症に苦しみ、出産した子どもにも後遺症が残る。被爆者として国連総会にも出席し、原爆を三度許してはならないと訴えた。

また、平和・文化講座に関しては、内外の多くの研究者、実践者を招き、平和に果たす女性の役割、歴史にみる宗教の戦争へのかかわり、戦争を阻止するために女性はいかに力を発揮できるか、等の視点から平和運動の在り方を考える場として開催してきた。

また、同委員会は、展示活動にも力を入れている。国連の「平和の文化」の提唱を受け、二〇〇二年には「平和の文化と女性」展を開始。二〇〇七年には全面的にリニューアルして日本国内を巡回している。平和学者のＥ・ボールディング博士が監修に当たったこの展示は、日本で五十以上の都市で開催され、百十万人以上が鑑賞している。

私もこの展示の作成に関わり、ボストンでボールディング博士にお会いした際には、監修の御礼として、展示の内容と反響を収めたアルバムをお届けした。博士は、時おり感嘆の声をあげながらすべてのページを丹念に見てくださり、「お役に立てて本当にうれしく思います。平和委員会をはじめ、ＳＧＩの女性たちがこのような活動をしていらっしゃることはとてもすばらしいことです」と称えてくださった。八十五歳の博士とのこの会見は、強い印象で今でも心に残っている。

同委員会は、現在も引き続き活発に活動をしており、

SGI内外の友との平和の輪を拡大している。このように、「平和の文化」創出のための地道な活動が、百九十二カ国・地域で展開されているのである。

おわりに

池田SGI会長は、フェリックス・ウンガー博士との対談において、平和構築に取り組んできた原点として、①自身の戦争体験、②師の精神の継承、③宗教者としての社会的使命をあげている。

私の平和行動の原点の一つには、私自身の戦争体験があります。

第二次世界大戦で私は、出征した長兄を喪い、空襲で家も失いました。気丈な母が、長兄の遺骨を抱きかかえ、身体を震わせて悲しんでいた姿が忘れられません。「国家悪」が一家の平和を奪ったのです。

私は、一人の青年として、身をもって、戦争がいかに愚劣で醜悪で無惨なものか、いかに嘘で塗りかためられているものか、痛いほど知りました。

二つには、師の精神の継承です。

第二次世界大戦のさなか、生命尊厳の哲学である日蓮大聖人の仏法の精神のままに立ちあがったのが、創価学会の牧口常三郎初代会長であり、私の直接の師匠である戸田城聖第二代会長でした。

軍国主義と戦った両会長は逮捕され、牧口会長は獄死しました。生きて出獄した戸田会長は、師匠・牧口会長の精神を継いで、平和の闘争を開始しました。

私も今、戸田会長の精神を、まっすぐに受け継いでいるつもりです。「この地上から悲惨の二字をなくしたい」――この戸田会長の「夢」の実現に向かって行動することが、私の人生のすべてなのです。

そして三つには、宗教者としての社会的使命です。

現代においても、多くの民衆が苦しんでいます。直接的暴力にせよ構造的暴力にせよ、あらゆる種

類の暴力によって。これが現実です。

この苦悩する人々を前にして、座して思索にふけるのではなく、「抜苦与楽」のために立ちあがっていく――燃え上がる「同苦」と「行動」にこそ、大乗仏教の魂があります。私どもが信奉する日蓮大聖人は、この仏法者の使命を「立正安国」として教えておられます。

暴力におびやかされる民衆の悲惨を救うために戦わずして、自己自身の魂の救済などありえません。その暴力の最たるものが戦争です。(11)

そうした思いから、核兵器廃絶にもなみなみならぬ力を傾注してきたのである。そして、その特質の一つが、女性への期待である。

ＳＧＩでは女性の活躍が目立つことがよく指摘される。その根底には、ＳＧＩ会長が強調するように、ブッダの男女平等観、「法華経」における竜女の成仏、日蓮の女人成仏論などに脈々と流れてきた、一筋の女性解放思想の系譜が存在する。池田ＳＧＩ会長の女性観は、その系譜につらなるものである。

人類的課題が山積している現在、人類の運命を転換し、混迷に満ちた人類社会を平和へ、生命尊厳の方向へと転轍し、人間を最優先に考える社会を構築することが緊急の課題となっている。池田ＳＧＩ会長は、そうした潮流の主体的な担い手として、従来はあまり発言や行動を行わない傾向があった女性たちに大きな期待を寄せているのである。

痛みを知る人は、他者の痛みを聞き、汲み取り、慈愛をもって同苦するまなざしをもっている。従来無視されがちだった女性の視点・発想・行動に、未来を開く可能性がある、と。「ジェンダー視点だけでは世界は語れないが、ジェンダー視点なしでも世界は語れない」といわれるが、平和、核兵器廃絶についても同様のことがいえるであろう。

ＳＧＩ会長の期待に呼応して立ち上がり、仏教の深い哲理に根差した女性たちの連帯の輪は、今や世界的規模へと拡大している。そして、二十一世紀を、人間が大切にされ、男性も女性もともに責任を分かち合い、

人間として伸びやかに自己実現し、社会に貢献しつつ、幸福感を満喫できる世紀とすべく、活発に活動を展開しているのである。

注

(1) 戸田城聖「原水爆禁止宣言」、一九五七年九月八日。
(2) 池田大作「核兵器廃絶へ　民衆の大連帯を」二〇〇九年九月八日。
(3) 同前。
(4) より詳しくは、創価学会のホームページを参照のこと。http://www.sokanet.jp
(5) ベティー・リアドン『聖教新聞』二〇一五年八月三十一日付。
(6) 池田大作「平和の文化　対話の大輪」二〇〇〇年一月二十六日。
(7) 同前。
(8) 池田大作「新たなる価値創造の時代へ」二〇一〇年一月二十六日。
(9) 池田大作「核兵器廃絶へ　民衆の大連帯を」二〇〇九年九月八日。
(10)『平和への願いをこめて』全二十巻、一九八一－九一年。タイトルは以下の通り。
第一巻　引揚げ編『あの星の下に』
第二巻　従軍看護婦編『白衣を紅に染めて』
第三巻　戦後生活（関西）編『雑草のうた』
第四巻　広島・被爆その後編『ヒロシマの心・母の祈り』
第五巻　学童疎開編『思慕と飢餓のはざまで』
第六巻　基地の街（神奈川）編『サヨナラ・ベースの街』
第七巻　女たちの戦禍編『うたかたの花嫁』
第八巻　聞き書き（千葉）編『母たちの戦場』
第九巻　戦争未亡人（埼玉）編『女ひとりの戦後』
第十巻　女教師編『戦禍の教室で』
第十一巻　樺太・千島引揚げ（北海道）編『フレップの島遠く』
第十二巻　沖縄戦後編『いくさやならんどー』
第十三巻　被爆二世（長崎）編『終わりはいつですか』
第十四巻　農村婦人（東北）編『この土あるかぎり』
第十五巻　女子挺身隊（中部）編『白紙に消えた青春』
第十六巻　満蒙開拓（長野）編『永遠の大地もとめて』
第十七巻　国防婦人会（大阪）編『かっぽう着の銃後』
第十八巻　四国編『息子をもどいとうせ』
第十九巻　戦争孤児（東京）編『孤児たちの長い時間』
第二十巻　外地編『祖国はるかなり』
(11) 池田大作／フェリックス・ウンガー『人間主義の旗を――寛容・慈悲・対話』東洋哲学研究所、二〇〇七年、十六－十八頁。

（くりはら　としえ／東洋哲学研究所主任研究員）